

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針

- 人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

問題作成部会では、上述の作成方針に従い、高校生自らが人間として社会で直面する倫理的諸課題を日常の具体的な場面と関係させ、教科書で学ぶ先哲の知見を応用して批判的に吟味する力、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する力を評価できるような問題作成に努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

道徳的に善いとされる行為を実践しようとする際、それが善いと思いながらも行動できないことがある。本問題は、その際の内面の活動と行為のありようを主題とした。問1～4は主題に関連する形で知識を問い、問5～8は資料読解を通じて思索を深め、問題を通じて、「実践したいけれどもできない」ということをどのように捉えるのかということについて考察が深まることを目指した。後半に関しては、「メッセージ性に優れる」との評価を受けた。各設問については、共通テストで求められる資質・能力を問うことを意識するとともに、源流思想の各分野についての基本的な知識・理解をバランスよく出題すること、またできる限り多くの分野の資料を用いることを意識した。

問1は、「実践」に関する多様な思想・宗教についての知識を問う設問である。選択肢の中、中国に関しては問うポイントが「やや細か」すぎ、「難問」であるとの評価を受けた。よりわかりやすいポイントを問うか、あるいは問題形式をより平易なものにすべきだったかもしれない。問2は、行為とその結果の関係に関する多様な思想・宗教についての基本的知識を問う設問である。難易度は適切であったと考える。問3は、ムスリムが義務として行う信仰告白に関する知識を問うことにより、アッラーやムハンマドに対する理解も含めたイスラームに対する重層的理解を確認する問題である。単に信仰告白の暗記問題にならないよう工夫したつもりだが、教科書内容の制約と重複回避を考慮するとできることは限られており、結果としてやや平易な問題となってしまった。イスラーム分野のみで知識を問う問題は、作り方に工夫が必要である。しかし振り返ると、信仰告白に限らず五行全体から設問を作り、過去の問題と重なる点があった場合は問う内容において差異を作ることもできたと考えている。問4は、様々な宗教や思想における心やその在り方についての知識を問う設問である。この問題も、教科書記述に基づく基本的な知識を問うつもりだが、意外にも難易度は高かったようだ。仏教に関してかなり細かな知識を問うてしまった点が反省点だったが、ギリシアの「懐疑論」についても「正誤判断が」難しいと指摘を受けた。知識問題の難易度に関しては、各分野いずれも慎重に検討する必要がある。問5は、キリスト教における行為を伴わない信仰を批判する「ヤコブの手紙」を読み、資料を理解して倫理的課題について考える論理的思考力と、ルターについての知識を問う問題である。資料読解が比較的平易だった。問6は、

仏教で心と行為について述べる『ダンマパダ』の資料を読み、資料を理解して倫理的課題について考える論理的思考力と、仏教における実践についての教科書知識を問う問題である。問7は、プラトンの資料でソクラテスの思想について述べる『プロタゴラス』を読解し、資料を正確に理解した上で、倫理的課題について考える論理的思考力と、ソクラテスからプラトンへの思想的展開についての知識を問う問題である。問8は、王陽明『伝習録』において、致良知と良知を妨げる欲の関係について述べる資料を読み、資料を理解した上で、教科書知識も踏まえてリード文で述べられた「行動できない」という事柄を説明するとどのようになるかを考える論理的思考力を問う問題である。新形式の問題であり、問いかけ文に工夫を施した。日常生活と「結びつけて理解を深める工夫がされ」ており「良問である」と評価された。

第2問

テーマは「縁」である。縁の不思議さに関心を持った高校生が、日本思想の中からこのテーマに関する調べ学習をするという場面設定である。この中で、縁の持つ一種のコスモロジカルなつながり（縁が織りなすネットワーク）の中で自らが生かされて生きているという気付きへと理解を深めていくことになる。Ⅰでは人と人の縁、Ⅱでは人と生き物の縁に主に焦点を当てて問題を作成した。「授業で学んだ先哲の思想についての知識を用いながら資料を読解させるなどの良問が多く含まれていた。出題範囲も古代から近現代まで、バランスがよく、標準的な難易度の大問である」という評価を受けた。

問1では中世の思想家の無常観をめぐる知識と理解を問う問題である。この問題は特に、文学史的なものが主となった。和歌や随筆の文章を具体的に示したかったが、それだと文章を読み解く能力のみを問う問題になりかねないので、これを避けたところもある。問2では儒学思想家である中江藤樹の思想についての知識を問う問題だが、これは当然できて良い設問レベルであると思われる。問3では、近松門左衛門の作品から、義理と人情との葛藤の根本に親子の縁の問題があることを読み取らせ、そこで見出した倫理的課題を具体的な日常生活での場面にも適用して思考する力を問う。縁について力を入れた問題としたつもりであるが、やや平易な設問となった。問4では、近代における縁について、個の自立との関連で夏目漱石と和辻哲郎に関するレポートを読ませて解かせる問題である。結果として下線部の正誤を問う問題となり、もっとレポート全体を読ませる問題にすべきだったと思う。外部評価委員からもそのように指摘を受けた。この点に関しては、近代日本においても、個の自立はそれを支える縁との関わりにおいて考えられているので、今回レポートで論じた内容については、将来的には教科書にも記載されることを期待している。問5では、日本の古代の人々の神観念や神道思想についての知識と理解を尋ねた。縁という概念は直接出てこないものの、その前提となる仏教の受容に関係する問題であったが、難易度は高かった。問6では、社会の問題について考えた近代の人物の正誤を尋ねた。西光万吉という部落解放運動家を取り上げたが、この人物はどの教科書にも掲載されている。問7では、親鸞の思想知識を踏まえて、資料から親鸞の縁（特に生き物との関わり）の理解を正しく読み取り、倫理的に課題を捉える思考力・判断力・表現力等を問う。これは縁についての日本仏教のオーソドックスな問題になったと思う。問8は趣旨を問う問題である。これまでの学習を振り返って、単に思想上の概念の意味内容を問うのではなく、これを現実の倫理的取組みの問題として考える応用力があるかどうかを問題にした。

第3問

冒頭リード文ならびに問8を中心とする大問全体を通して、近現代西洋の社会思想史を辿

りながら、社会について考察することを通じて「他者と共に生きる」という倫理的テーマについて主体的に考えるよう促すことを目指す問題であった。思想史全体の流れを俯瞰できるリード文形式を採用し、問8の先生と生徒の会話を通じて冒頭リード文で出てきた「他者と共に生きる」という課題を敷衍し、更なる学びへのきっかけを与えることをねらいとした。近現代思想についてバランス良く問う問題になったと考えている。

問1は、エラスムス及びトマス・モアの事績についての知識を問う4択問題だった。必要以上に細かな知識を問う問題になってしまっていなかったか、問題作成者としても注意していきたい。問2は、資料としてスピノザの『神学・政治論』を取り上げ、教科書などでは扱われていないが重要なスピノザの社会思想の側面へ注目を促す設問だった。問題としては平易だったが、こうした新たな側面を提示する設問は現場で教える際の参考になるとの評価も頂いた。問3も、教科書での扱いが比較的少ないヒュームの社会思想の側面に注意を促す解説文を付し、教科書で扱われるヒュームの思想とのつながりを意識させながらヒュームについての知識を問う問題だった。単にヒュームの思想の知識の暗記ではなく、「因果」と「帰納」という用語の理解を問う問題になるよう工夫したが、その点の理解の差が解答に結び付いているように思われ、問題作成者の狙いどおりとなった。問4は、ヘーゲルの人倫、その中でも市民社会についての知識を問う4択問題だった。シンプルな4択問題であり、難易度は標準的であった。問5は、西洋近代の画期をなす啓蒙思想を代表する一大プロジェクトである『百科全書』について、それがもつ社会思想的な含意について、資料の読み取りと知識の両面からその理解を問う問題だった。多少正答率が低く、適切な難易度の設定が今後の課題である。問6は、サン＝シモンとコントの事績についての知識を問う4択問題だった。通常教科書では、前者が初期社会主義者の一人として、後者が実証主義の提唱者として、異なる文脈で扱われるが、影響関係にあった両者を同一の問題で扱うことで、教科書の知識を異なる枠組みで見られることを示唆する4択問題だった。「受験者はとまどったと思われる」との評価もあったが、他方で「コントの実証主義やサン・シモンの人道的な立場からの資本主義批判だけでは捉えきれない工夫がなされている」との評価も頂いた。問7は、資料としてハーバーマスの『公共性の構造転換』を取り上げ、ハーバーマスの知識と資料読み取りを通じて、市民的公共性と現代におけるその危機についてその理解を問う問題だった。「やや難易度は高いが、興味深い資料の提示によって、かつては有閑階級が公共性の担い手になっていたことを受験者に教えている」との評価も頂いた。問8は、冒頭リード文の最後の段落で語られた社会がもたらす画一性という論点について、高校生と先生が語る会話文を読み、冒頭リード文への理解を深めるとともに、設問全体の趣旨の理解を問う問題だった。「標準的な難易度の良問」との評価も頂いた。

第4問

冒頭の会話文ならびに問9を中心とする大問全体を通して、現代社会における孤立の問題と高校生世代で高まっている孤独へのあこがれを取り扱った。そのねらいはいくつかある。まず問題作成者は、「倫理」の教科書を俯瞰し、現代社会の重要問題であり、かつ先哲の教えにも登場するキーワードを探した。先哲の思想を現代の倫理的諸課題に応用しながら思考する能力を問うことをねらった。

最終問において「孤立」と「孤独」という二つの言葉を区別して用いることを、先生役が提案する。これは、複雑な問題の整理のために対立概念を使用すること、日常的にも使われている言葉に明確な定義を与えて使用することという、論理的思考に必要な操作である。

評価は、高等学校教科担当教員、教育研究団体ともに、問題の難易度に言及している。お

おむね基本的な知識と資料の読解力を問い、「平易な設問」から「高い考察力を必要とする設問もある」と、高い評価を得ることができた。

各設問については、上述のテーマと関連した出題になることを意識しつつ、共通テストで求められる資質・能力を問うことを目指し、現代の倫理的諸課題、青年期の課題の各分野をバランスよく出題することを心掛けた。問1は、個人と共同体の関係を論じたサンデルと孤独な群衆を描き出したリースマンについての知識を組み合わせた設問である。サンデルは教科書採択率が低い、世間の注目度が高く、教育現場で取り上げやすい問題を論じている思想家である。高等学校教科担当教員は、「難易度が高」いので資料問題にするべきだと評価したが、教育研究団体は「平易な問い」と評価が分かれた。問2は、青年期のネガティブな孤立状態を記述した選択肢の中から、将来のための準備というポジティブな意味を含む心理・社会的モラトリアムについての説明を選べるかを見る設問である。問3は生命倫理の知識を問う問題だが、本人の意思を尊重して手を差し伸べないことと、生命の尊厳や神聖性ゆえに治療をやめないことの葛藤が、設問の背景にある。問4は、情報通信技術をめぐる制度や倫理的課題についての知識問題だが、高齢者と関連付けて生徒が調べたレポート内の語句の正誤を見極めさせるものである。問5は、アーレントに関する知識と、アーレントの資料についての読解を同時に問う。資料は、思考という「孤高」な営みは「独りぼっち」ではなく、自分を仲間としている、というアーレント独自の主張を取り上げている。通常用語法と異なる用語法を用いた主張が読み取れるか、が読解のポイントである。問6は、一人でいることと他者といることとの葛藤を示唆する「ヤマアラシのジレンマ」を取り上げた。問7は環境倫理に関する純粋な知識問題である。問8は、60歳以上の一人暮らしの生きがい感が日米で異なることから、アメリカでは一人暮らしでも生きやすい社会の仕組みがあり、日本では支え合って生きるほうが良いと考える文化的価値があるという判断に到達できるかを問うた。孤立・孤独に関する考えを相対化するねらいもある。単純なグラフの読み取りとしては適切でも会話の文脈からは不適切な選択肢があるという新機軸を打ち出した設問だった。問9は前述のとおり、先生が孤立と孤独という言葉を使い分けて、議論を解きほぐすことを提案し、生徒が自分の主張に当てはめて理解しなおすというシーンを設定した。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

高等学校教科担当教員や教育研究団体より、試験問題の内容・範囲、試験問題の分量・程度、試験問題の表現・形式等について、多面的に意見・評価をいただいている。

教育研究団体からは「全体を通して質・量ともに共通テスト初年度以来、同程度を維持しているものの簡単に高得点は取れないようにしているという点では少しずつ難化しているように見える」と全体として適切であった評価を得ている。

高等学校教科担当教員からは、「バランスよく幅広い分野が出題されており、範囲、難易度としては適切である。対策をしていれば時間内の解答についても問題のない分量である」と評価された。

4 ま と め

高等学校教科担当教員から、「全体を通して、『倫理』における探究学習の進め方や、その生活への応用可能性が示されており、授業改善に資するものとなっていた」という評価を得たのは、出題者の意欲を喚起するものとなっている。学力を測る試験としての安定性を確保すると同時に、高等学校の教育現場の授業改善に結びつく出題を心掛けていきたい。

基本的な知識の確認，思考力・判断力・表現力等を問うこと，高校生の学びの指針となるだけでなく高校生へのメッセージとなること，教育現場における改善に資するような資料を活用することなどの課題をさらに充実できるように取り組んでいきたい。